



※ “つるみん” 平成 26 年度第 38 回鶴嶺祭『ゆるキャラグランプリ』でグランプリを受賞。1 年 2 組小山田夏芽さん、鬼塚麻未さん（旧クラス）の作品で、その思い（願い）は、3 つ。・「世界中を飛んで、鶴嶺の名を広めている鶴」・「好きなものは笑顔と思いやり」・「鶴高生と協力して、世界中を笑顔にするのが夢」です。体育祭で全力を出し切り、ほっとする気持ちから心を切り替えることが、簡単な人や難しい人もいろいろです。そんな時もどんな時も、身心を休めに図書館へ来てください。何かヤル気がでてくる本が見つかりますよ。

図書館司書



◆テレビドラマ化された本

◆手話、点字に関する本

◆『マーガレット・ミッチェル』を知っていますか？

今月のおすすめ本（司書 ver.）

手話の本を一冊ご紹介します。

野澤久美子【監修】 『やさしい手話教室』 日本文芸社【出版社】

手話は、目で分かるボディランゲージですね。幼児がバイバイするように、楽しく学べる視覚言語なのだと思わず、司書も学びました。知らないでしていた手話も見つけました。“ごめんなさい” でした。謝ることは誰でも同じ動作になるのですね。本の紹介もしています。ぜひ、見に来てください。

高校時代読んだ本

4 5 6 7 9 10 11 12 1 2 3

皆さんは、新しい国語の教科書を手にした時、一番初めにどの教材から目を通すだろうか。私は、短歌や俳句を真っ先に読んだものだった。

「空き缶がいつか見ていた夏の空」

これはその時私の目に飛び込んで来、今でも惹かれて止まない俳句である。その俳句だけは、「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」や「鯨鱈の骨まで凍ててぶち切らる」とは違った。都会のアスファルトの上に転がる空き缶。いつまでも忘れ去られたような空き缶が、実は発していた息遣い……のようなものを私に感じさせた。今私が生きて呼吸しているこの時代の俳句であった。

それから私は本屋に行き、今の私を感じさせてくれる俳句集を捜し、金子敦さんという横浜在住の俳人の方に出会う。「猫」「砂糖壺」「乗船券」などなど。カステラの弾力やグラニュー糖の山に春を感じ、少年の肩甲骨に夏を歌う俳句の数々が収められている。

「砂糖壺の中に小さき春の山」

「水遊び肩甲骨のいきいきと」

そうして私自身も俳句を詠むようになった。高校時代に開眼し、今へと続く俳句の道。今では歳時記が愛読書として、私のリュックの中に必ず収められている。

さて、これから俳句を創作してみようという意欲を持っている皆さん。皆さんには「17歳の青春」を是非お勧めしたい。全国の高校生達の応募作品の中から選ばれた優秀作品と、選考方の辛口批評が載せられた、高校生達の本格的な俳句集である。豊かな東北の自然の中で、都会の動物園に佇みながら、高校生ならではの純粋な感性を言葉に留めた俳句集である。中には募集要項も綴り込んである。読書から実生活へと、皆さんの知性を羽ばたかせて欲しい。

金子敦【著】『乗船券』 ふらんす堂【出版社】

国語科 K.M.